

ミステリーでも**京都**はすごい——西村京太郎、山村美紗、綾辻行人

編集人 吉田英生 (S53/1978卒)

外出自粛の中、編集人はミステリーについて大して詳しい訳でもないのですが、最近の投稿が少ないこともあり、京都にまつわる話題をお届けしたいと思います。

その前に、イギリスから“ミステリーの女王”アガサ・クリスティー(1890～1976)の自薦十選は、数藤康雄氏(アガサ・クリスティー百科事典作品・登場人物・アイテム・演劇・映像のすべて、(2004)早川書房)によると、以下のとおりです。

最初の選出は小規模なもので、結果にはそれほどほどの意義はないのだが、重要なことは、翌年その結果をクリスティーに知らせ、クリスティー自選ベストテンを聞き出せたことである。クリスティーは「その時どきの気分で作品は変わる」としながらも、以下のベストテンを披露した(ただし順位は無し)。『そして誰もいなくなった』『アクロイド殺し』『オリエント急行の殺人』『予告殺人』『火曜クラブ』『ゼロ時間へ』『終りなき夜に生まれつく』『ねじれた家』『無実はさいなむ』『動く指』一般のミステリ・ファンからはあまり評価されていない『終りなき夜に生まれつく』や『無実はさいなむ』を挙げていることには、多いに注目すべきだろう。

『そして誰もいなくなった、And Then There Were None(1939)』は名作中の名作ですよね。これをベースとして『殺しの双曲線(1971)』を書いた西村京太郎さん(1930～)と『十角館の殺人(1987)』を書いた綾辻行人さん(1960～)の対談では以下のようなやりとりがあります(西村京太郎、新版 名探偵なんかこわくない(2006)講談社；綾辻氏の作品の方が後出なのに、以下で“自分の『十角館の殺人』と相通じる点がいくつも見つかって”という表現は、少し違和感ありますが)。

**綾辻** 『殺しの双曲線』は最近久しぶりに読み直してみましたが、やはり傑作だと思いました。クリスティーの『そして誰もいなくなった』への挑戦、ですよ。閉鎖された状況の中で連続殺人が進行する、いわゆる吹雪の山荘もの。自分の『十角館の殺人』と相通じる点がいくつも見つかって、今さらながら驚いたりもしました。

**西村** クリスティーがすごいのは、彼女の作った作品の枠組みかどこでも通用するってことなんだよ。ある種のパターンを作り上げてしまった。舞台がイギリスでも日本でも、どこでも使える。

綾辻さんは京大教育学部卒で推理小説研究会出身。一方、これまで超人的にも600を超える作品を世に出している西村さんは1980～1996年の間、京都在住。そして、京都が生んだ“日本のアガサ・クリスティー”山村美紗<sup>(1)(2)</sup>さん(1931～1996、作品数は360)が西村さんにファンレターを送ったことがきっかけで、お二人はその後、産寧坂そばの大きな旅館を共同で買い取り、本館と別館とが鍵付きのドアのある廊下で繋がっていたそうですね<sup>(3)</sup>；「母と西村先生の関係は、ライバルであり、戦友であり、よき理解者同士だったのだと思います」と娘の山村紅葉さんは語っています<sup>(4)</sup>。

西村京太郎さん旧宅	山村美紗さん旧宅

(1) 例えば、山村紅葉さんが選ぶ山村美紗「京都ミステリー」傑作長編は以下：京都嵯峨野殺人事件(1985.8)、京都不倫旅行殺人事件(1985.10)、京都茶道家元殺人事件(1987.2) (2) 山村紅葉、京都ミステリーの現場にご一緒しましょう(2015)PHP研究所 (3) <http://mainichi.jp/sp/shikou/46/01.html> 嗜好と文化 vol.46 西村京太郎 (2018.4)毎日新聞 (4) 山村紅葉、おきばりやす (2001) 双葉社